

高山長五郎とその遺産

高山長五郎（1830～1886年）は、日本の養蚕産業の開発、近代化、商業的成功において、影響力を持続けた人物である。彼は、清温育と呼ばれる斬新な蚕の飼育法を開発した。清温育により、繭の産出量は安定、改善した。彼はまた、蚕の品種、繭の質、糸の質の改善を進めることに貢献した。

長五郎は1830年、高山村（現在の藤岡市の一部）で生まれた。明治維新（1868年）で徳川幕府の武家政権が追放され、数年後には、旧侍の長五郎は家禄を失った。彼は生き残る方法を模索し、蚕の飼育に乗り出した。しかし6年間は、健康な蚕を生産することはできなかった。長五郎は蚕の飼育を始めて7年目にしてついに成功を果たし、1883年には自身の方法を解説する本を出版した。

1884年、長五郎は国内で自身の養蚕法を推進、発展させるべく、高山社を開設した。長五郎は1886年に亡くなる前、学生に向けた最後のメッセージを残している。これは、同郷人に対し「清温育を研究し続け、日本中にその教えを広め、国全体の利益と地域社会の幸福のために養蚕の改善を続ける」よう強く求めるものだった。長五郎の最後の言葉は、高山社の基本理念になった。高山社は教師を大日本帝国領の至る所に派遣し、1900年代初期には、日本は世界の生糸生産のおよそ60～70パーセントを占めていた。長五郎は56歳で亡くなった時、自分が日本の経済開発に影響を与え続けることになろうとは知る由もなかった。